漢典通考

洋学文庫
文庫8
D 255
1

文庫
D 255
J
三百五十九

故事談後編

畫典通考

普齋岡子雄 著述
橘辨次守國 圖畫

浪華書肆 寶文堂

39- 7964

畫典通考序

或ハ云ク人ハ不ハ通ニ古今ニ焉ト牛ハ稽
諸ニ古ニ而信ニ洲言ヲ必然トモ難ニ察
之ヲ義洲書之ヲ寡和ヲ必隙
必事ヲ必墨憶情惜ニメ而

擇其尤者類聚辭句而以
類備於賢子之美愚子弟淺
深雅俗之觀必是其微
意懷健人之一助乎異書
之編必初少年席間子孫

繕本為事於後編以後編
然而未足矣於是制殿
氏寶文堂數條深思懇雪
雖然不偏不知所載之
德默美於中書人橋守國

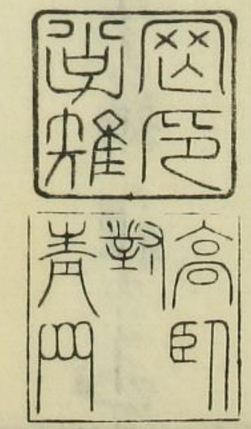
遽爾來離不遠之薄耶謙
之雖德於畫存之變化便
千蒙美是故當求有遠序
周之功志難事舊語舊者
采於卷載論畫之存者於

篇題詩畫典通考及於其
吟毫伸命作無罪疑狐而
之謂差唯線彰於畫工畫
意之美恐玩壺儀吾方思
禹蘇清謂玉霜蕃心者先

覽之胸臆乎哉

享保丁未仲春下澣

書于雜題



畫典通考巻之一目錄

故事談後編

大原野行幸
文覺上人
後成御
勾當内侍
津守國基
廣有
花園庄
參議佐理卿
明月記
為教
膳兵衛
蟻通
淀郭公
千代女

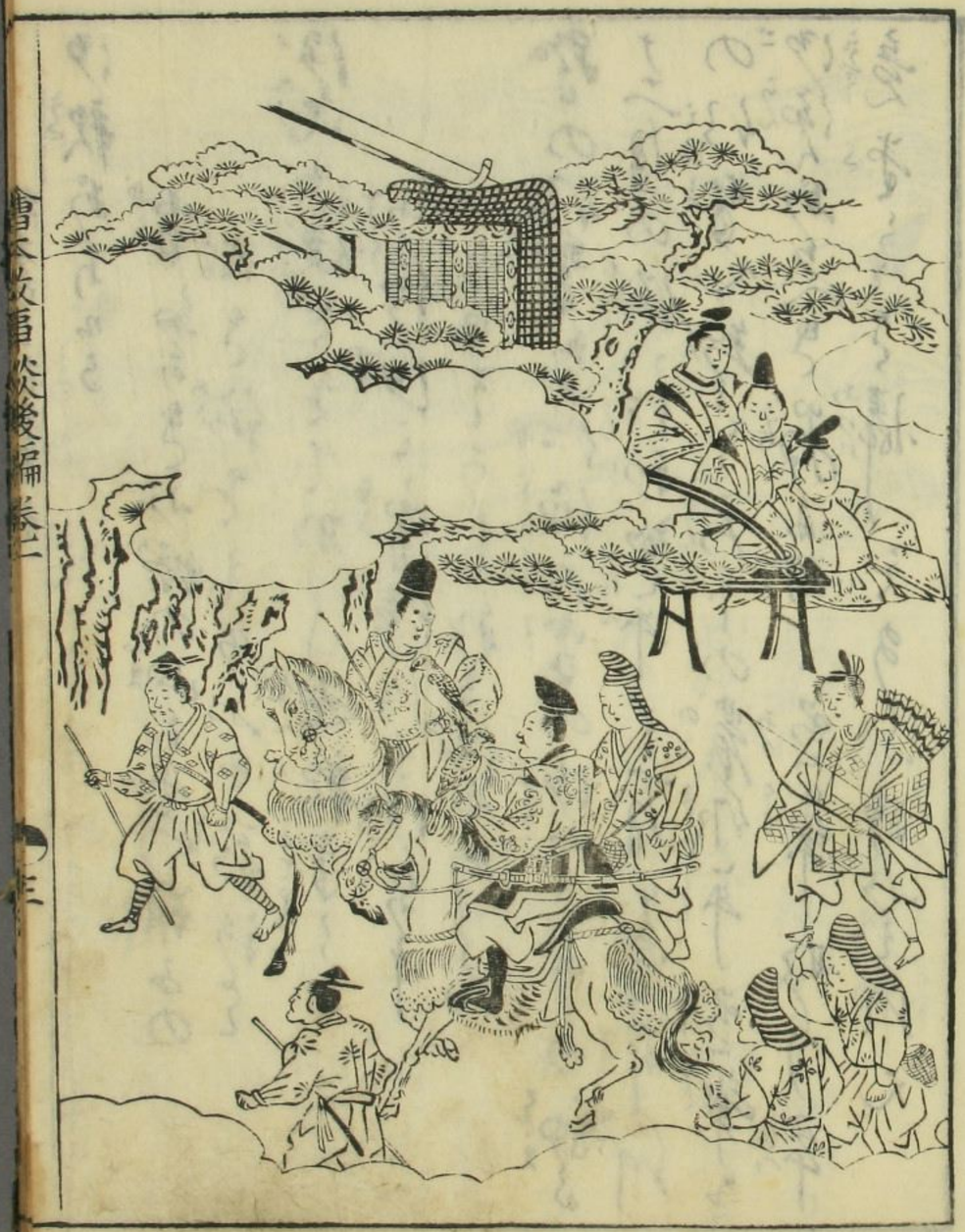
小野小町
家隆
玉生忠見
徹書記
和氣清麿
遊女白女
基通北政所
出水宴
成海法師
隆尊禪師
顯昭
陵王

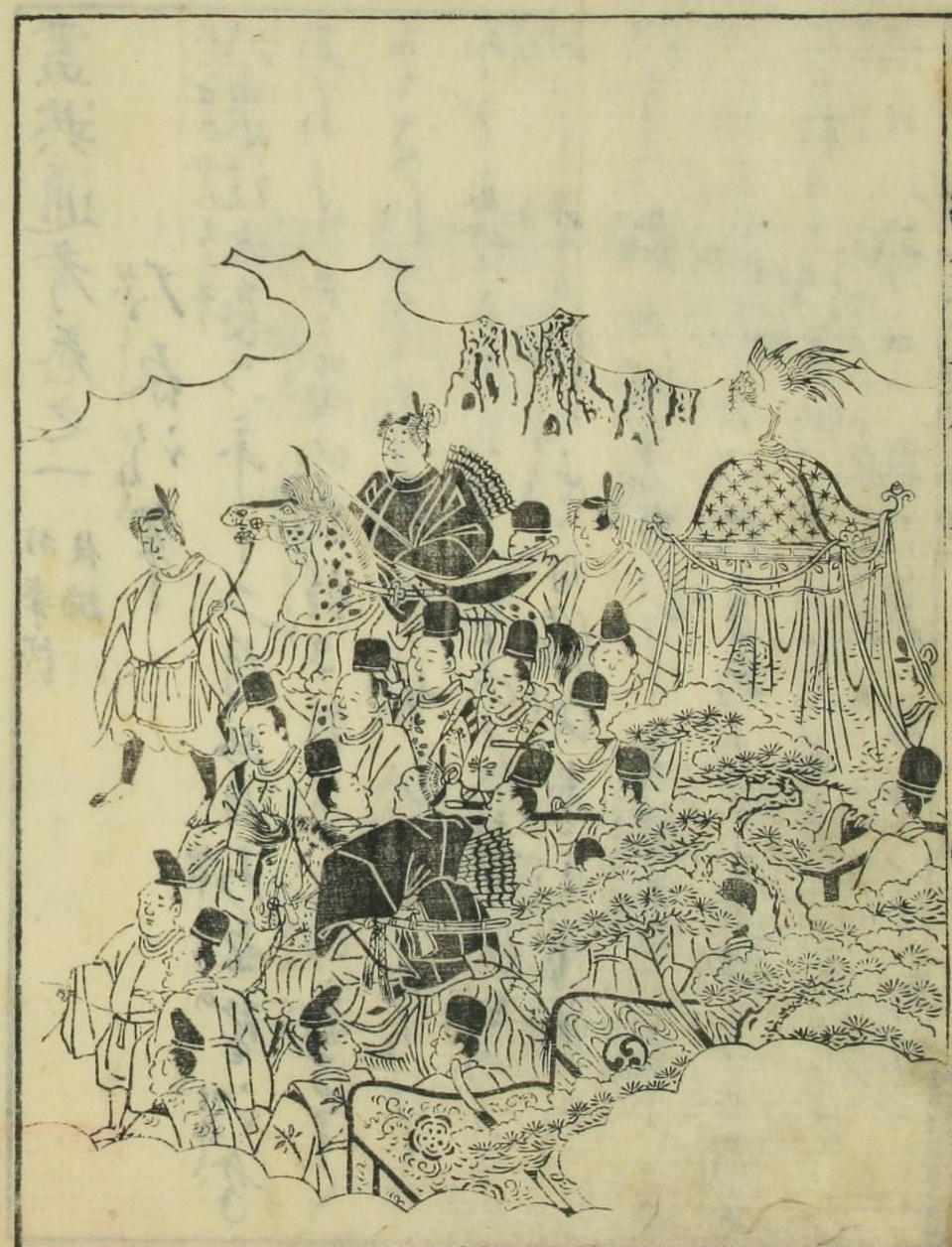
畫典通考巻之一

故事談
後編

大原法華

清泉院近長六年十二月廿九日大原法華
あり。しかるに、の明僧、法華経をまくる
ことさらに、くるしく、沙汰ひまなくあり。しか
るどもあるあるわしの人、競ひもつらん
如し。まる給へし。そもそも自源氏、平家の事ありて
代まの勢、あ源、平をひしをを迎善の帝
ちんとの給ふ。あるしあ源氏、平家
ありて、後の代をまあるあ。しかるに、後帝、
思ひ給ふ。弟子一枚、法事をしく下され





沙歌あり

[illegible]

沙氏沙使をそて形しる　遍歌をる

[illegible]

[illegible]

路の[illegible]を仁徳天皇の御宇[illegible]

さ二百の御ハ仁和[illegible]年さ二百卅年川

の[illegible]知[illegible]天下の農作年[illegible]年を

沙[illegible]あるべき[illegible]年[illegible]年

竟[illegible]帰[illegible]

参議佐理卿

参議佐理卿[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題をおくとひとしく風もおこらず花紅葉もちらぬ
仏陀の日そこの孤のを人那の

文豐上人

うるの雄のみ笑を西行の歌を時を同きしん
るるの西行の歌を時をこの歌をきしをきこ
いつくはひとひ仏の道あもあるみこの道を奉
西行のこそこそ揚ぎわしてこれるみ笑の
者わを思ひまわてい者者べきよ云入られば文
笑招じてうけ月ひおとひまわ仏ず
ちとそ孤しの明の名晴ぬ云ぬ

八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣作るその八重垣を

明月記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

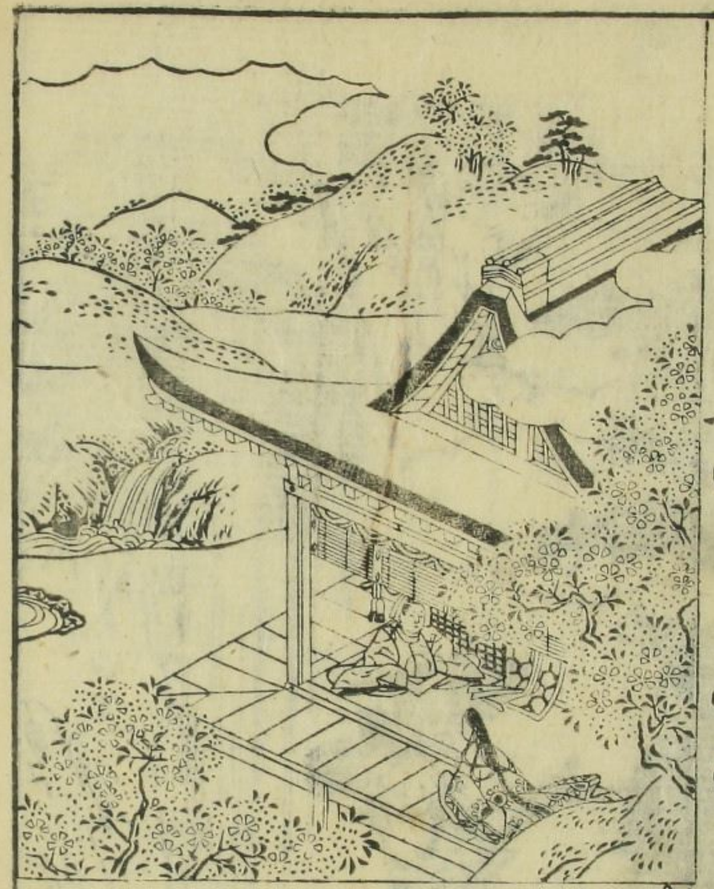
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うゆのんかを ゆすり 傷風のあ
ゆへ ゆ ゆ ゆ

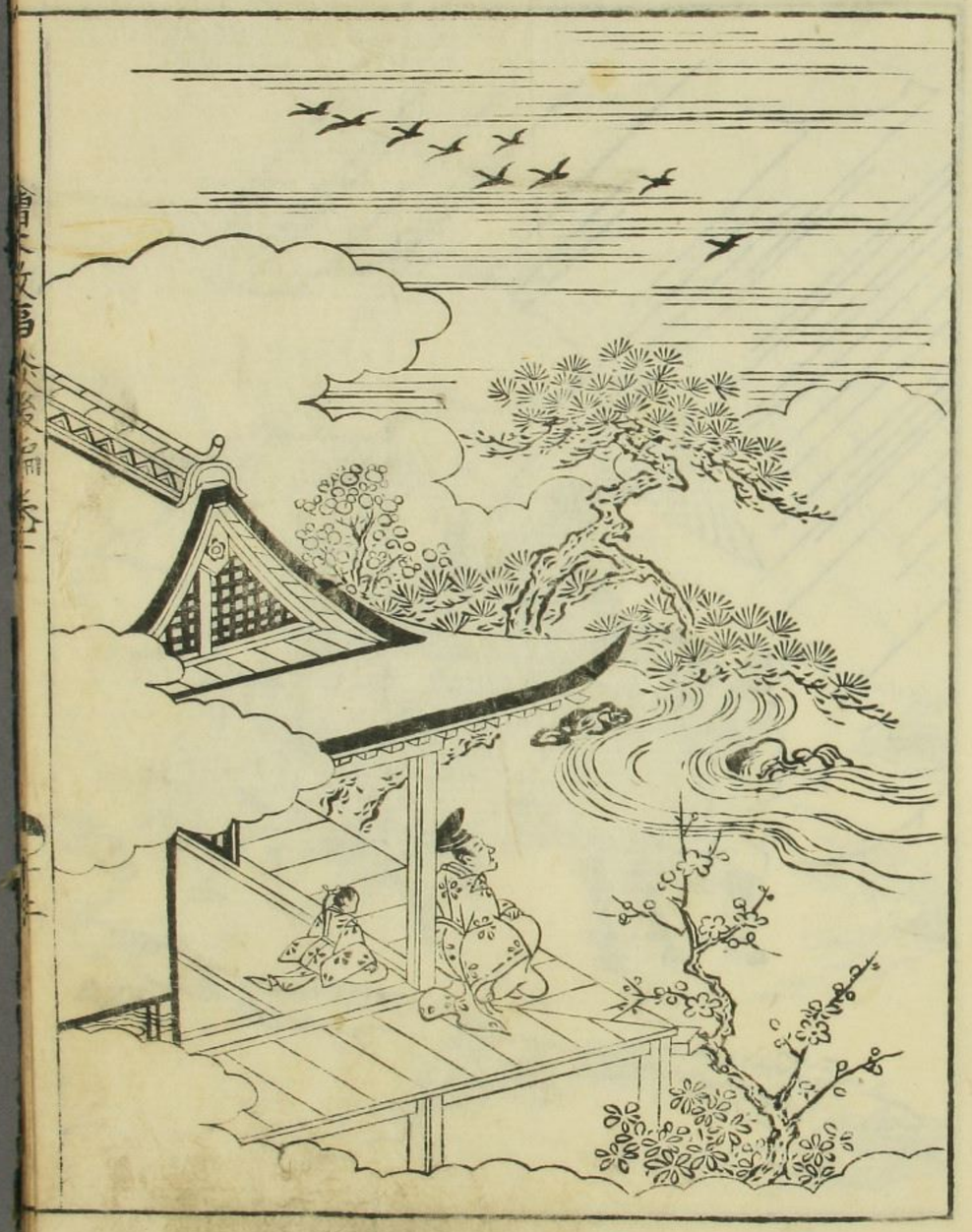


候ハヾ
ひてきゝがるをひ
たそしゝ笑へ
ハ
おの教うしろの山より
端を折て
まてひそかふ
瀧の蔭ちかく
ひけ
ハ
の
ちゝ
ゝ
ゝ

高き峯のゆくへを山と讀みつる時は此山をまことならざりしにやまとうたに住なれてそのかみの恩しく思ひもよらぬ此のみかどのくらゐをゆづり玉ふ事うらやましくたれしへを思ふ事は是より野にくだり武藏野の花のしるしを結ひとけにしまへはいとゞ哀ふかく野の末をりの花の匂ひに見えければ此程うつそ人やがてかれがれに此所辰の鍾を紙にうつしとゞめて其かたを書きしるしとゞめおかせたまひしがかくて失せにける

睦良衛

仁安の比高倉院の御時に鷺の群多く集りて御殿の上に集りなきさわがしく人々を悩ませける程にも射させらるべき人あらばと思召しけるに睦奧守何とかしてしのび長き事なるに射させよと仰ければ畏りて矢を持ちて一矢にて射とめけるに其ひつ鷺を御覧じ人々もおどろき射とめける鷺を取りて池に放ちけるにいづくへか飛さりけりあはれ一しほの誉なりとぞ申しける



上古武かの弱いすでにうたごてこてこてこしを射るに風義もいまだ
ちからこのかしあしをおくぬるくるくるも弱すすもおとうとを弱やか
上いるに伝こと歌風あわるる

清水の園基

或所よりひくくんく新撰和歌集の歌書の孫みこ
ゆるの弱者也のもかんゆるもちの
住吉の神を園基にあめあるて巳ふ歌よる
をあのぐおとひく兵ふ食ふく
伝るの形く東し相撲ふ書ふ書とあるる
あるるるるるぬ場る所あるもこ歌を撰かの

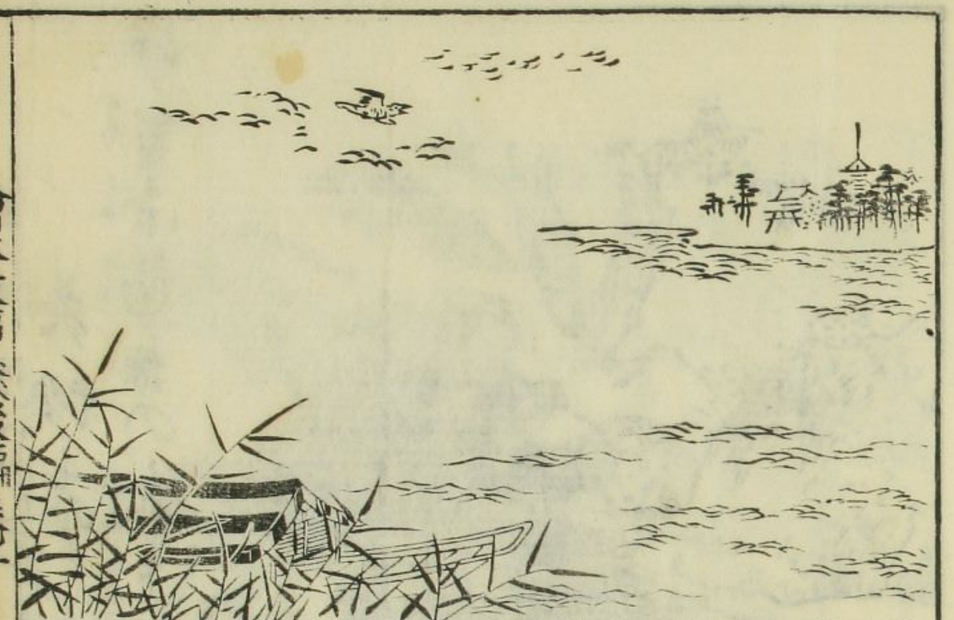
犧道

紀貫之、聞よりの四系の杉つゝ初て飛たつゝ
ぎ有るを杉手に取つゝ見て歌を
詠めの人の是あつて此の杉ふるあると聞すね
ども見ることを知らよつて書神去給ひし
らこしよりと云る神ありつゝ見れば
犧道の明神と社へ行きと卜ありば
うき是のあるあるなんもたつよ
あめとかしともはつべきこのそ
ゝ高を繰くゝ高を洗ひ瀬ぎ揚へ投げぬを
るもそのつゝとくゝ高つゝ行りぬ

廣元

建武元年八月の頃荻原に常陸殿の上洛怪異あり。夜思ひけるに新宮の神官の伊勢より地頭の沢瀬氏の氏寺に村雨の降時分に雷鳴し云ふ事量り難し。ほのぐらく陰のごとく物凄く雲の間よりて雷鳴して仁義殿の柱よりたゝみを傳ひ下り庭を傳ひて殿ひらびらとして一つ星の中に唱と風しばらく二十ばかりなり

一説廣有八隠岐守廣義カ二男や雑髪之後射怪鳥紙名弘舜



滝の波の時雨

前の新宮の伊勢より地頭

かし二月の半ばやあり

けん時雨の一雨降るを

伊勢き女の聲して滝の

滝りのまぐ求ふきあ小こ

瀧じゆまいんこ物ひけひ

るるなるるを形く感

嘆しける

いつくとみ滝そけん

ちぐまぎこ

花櫛の
伊賀の国
郡の
の
の

挑とゆきが母をくみんしこれ謡あがあや
まり之褒應の以ふ不足いとやむうして
感ぜられなひ伊賀國際聖る花絡よせられ
哥くともに花の時垣をあんぐて闌らく
七月節直して世をも乱そはらあ理縁聖の
の花をあくれ巷垣の花とふ前り

千代女

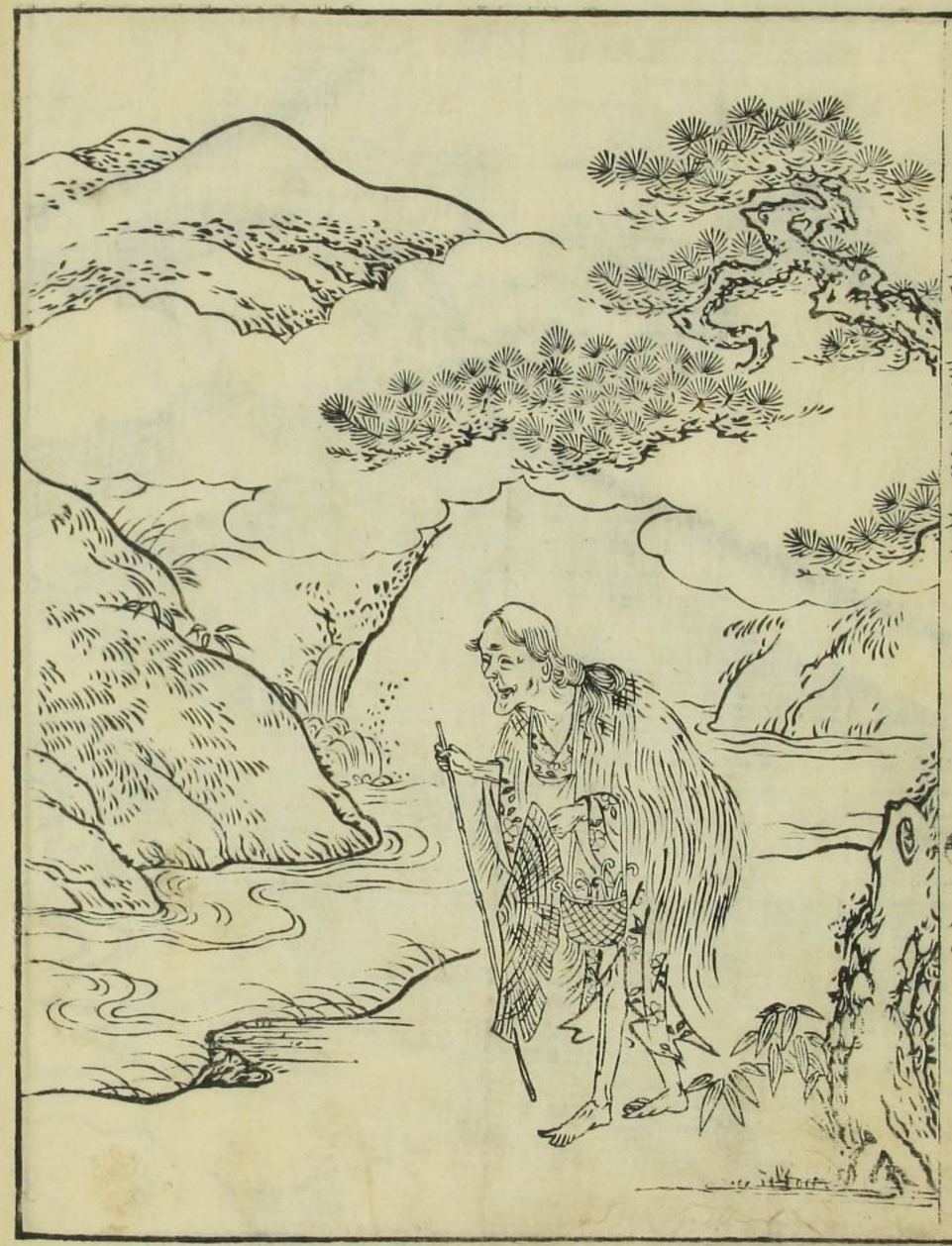
此尼ハ千代女といふ金沢越後守顕時の母に別
讃岐守貞氏の妻也貞氏卒して後美濃
の松見寺に行て剃髪し目就禅勧行し大
悟の縁をかるとき水を汲とて桶の底ぬ

悟けれバ詠る
ちよのゝかいたゞく桶の底ぬけて水たま
らねバ月もやどらず

五燈會元越ノ天衣義懐禅師水頭タルニ依テ水ヲ汲トキ擔子ヲレタリ
忽ニ悟道シ投機ノ偈ヲツクレリト云ヘリ碧巖曰直下便會セハ桶底ノ脱ト
相似タリト此意歌ト通ス

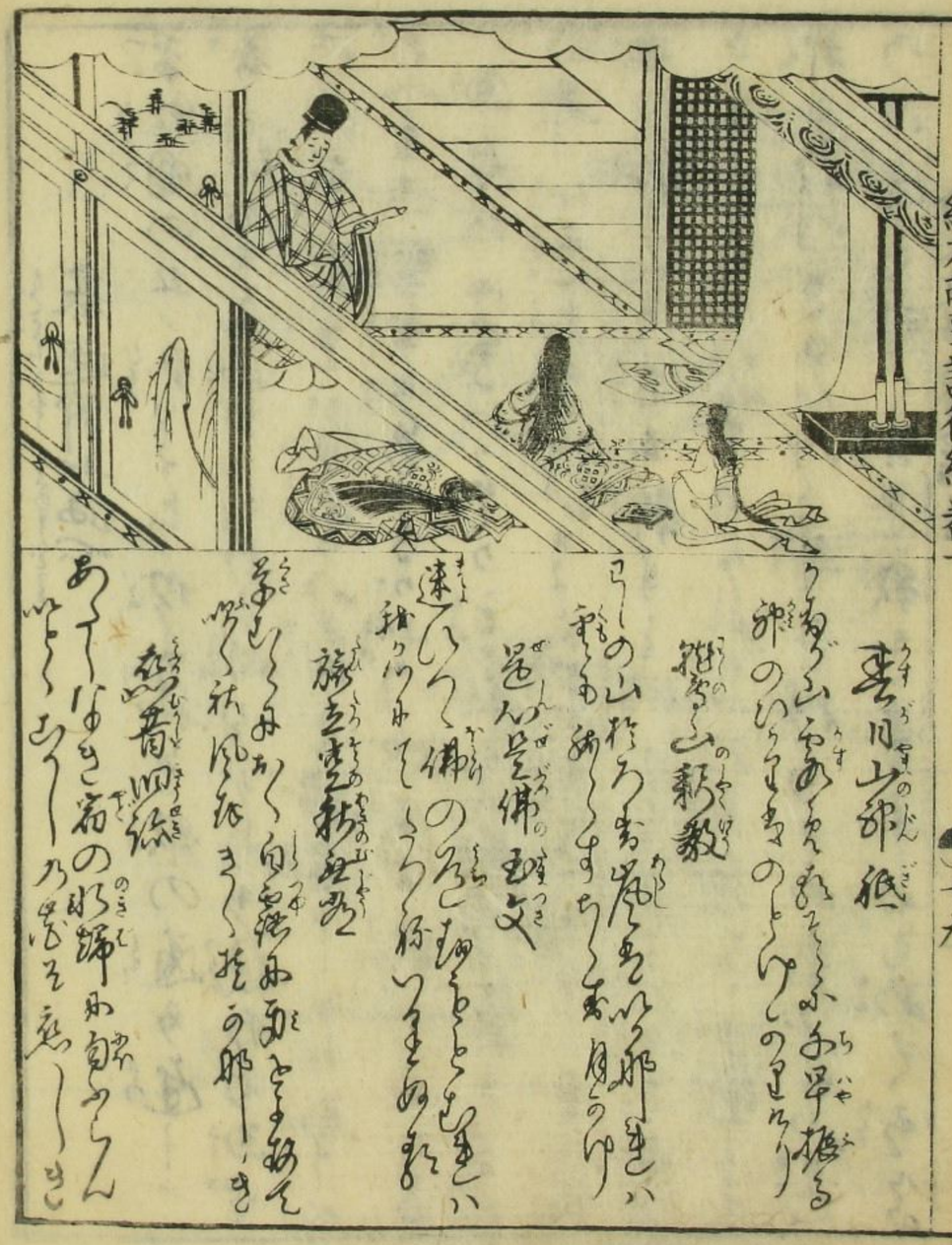
小野小町

浮世をゆめのごとし歌をよみ琴をかなでて遊ぶ事とこそ
まことに百かの小野の小町ゆゑ美女とうたはれ
すがたの美麗まのあたりの身をもかくしかたちの美しきを
柳の眉涙風に雪をくるをなびく花の顔月を迎へく
唐衣をしぼり袖をぬらし秋の夜遊舞の袖ぐしも執着
ふかきく蓬屋へくく狐狸の身となりの鄙百姓
尚ふかく狐の尾たる壇笠の形ふかく変化
必竟の理りを現ずる化の墨丈墨姫ふかるら



基通帰京

平和國の五ノ丑ノ年うつせみよ儒を歌の道を通して
ゆくべきなき世事なる時は国のあり使ありあり南嶺
乃河内の那也ハ日吾もるが小乃河内ハ仏あるめるる
わへ者清紫和尚也乃河内ハ高麗乃河内ハ高麗
の并小の丑ひそるの五の歌を知るべき那也ハ
歌しかんとす日歌ける仏けて猿くんとて歌
さしたるめ小ハるれば小の方色を清しして
打うたづきをひつて墨を摺めそめ紙じのふを
乃清をみ打くたき歌を書よりもあくるる



吉野山の桜紙

[illegible]

雅人の筆佛の玉文

[illegible]

旅立雲の新紙

[illegible]

番四紙

[illegible]

家僧

[illegible]

七月の初舞を踊られる

[illegible]

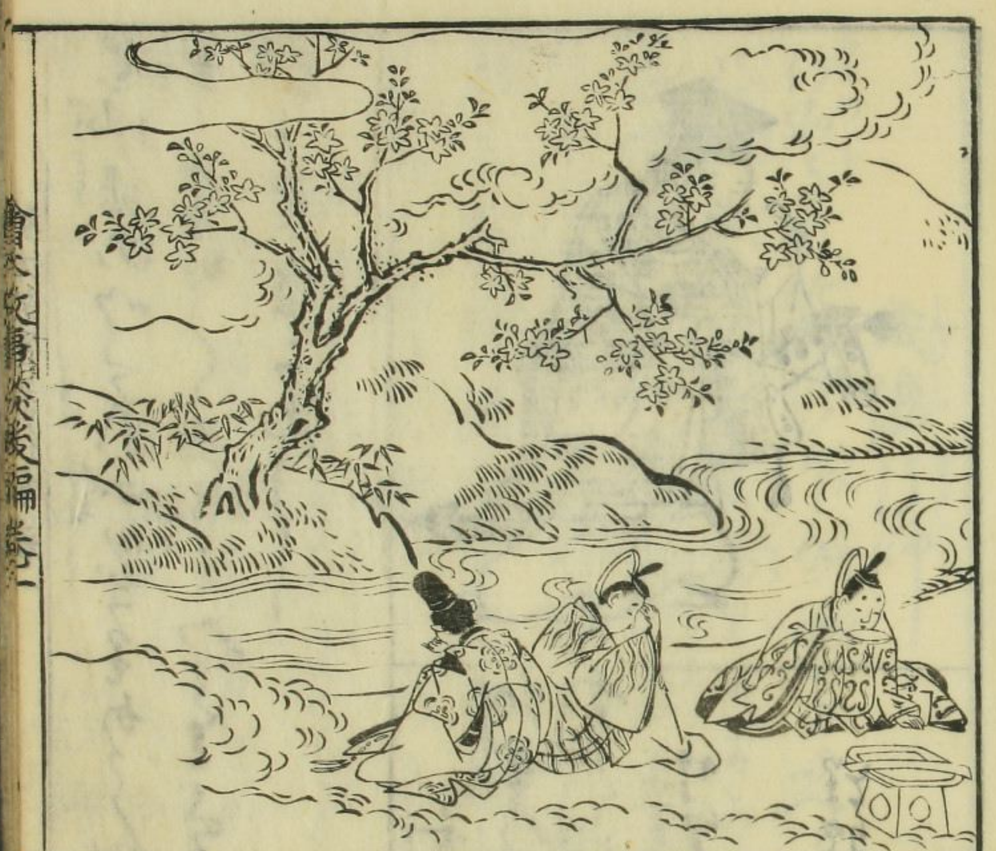
海の人魚の卵

[illegible]

家隆の墳ハとも云るの方り勝蔓の後ふあり枯ろく まつりちきと
泉及乃人碑を建つ碑の弘ハ清つ亥れ清低や

曲水宴

曲水の宴とは三月の
巳の日に上巳の
日文人詩人
を流の杯乃ゑと
里あて盃を上よ
里ながし　その
盃杯を取
中ふ詩句作りて
流を飲むことも
礙石遅来心竊待



幸流遥過手先遊
那よ　いつ小
ゑべし　知知も
頭宗天皇元年上
のこし日浜宛
中幸　那里て
れの裏ふ行し
ゑの月の代よ
里ふ　ま里て
ゆ　ゆ　那　代
の　ゑ　し　と

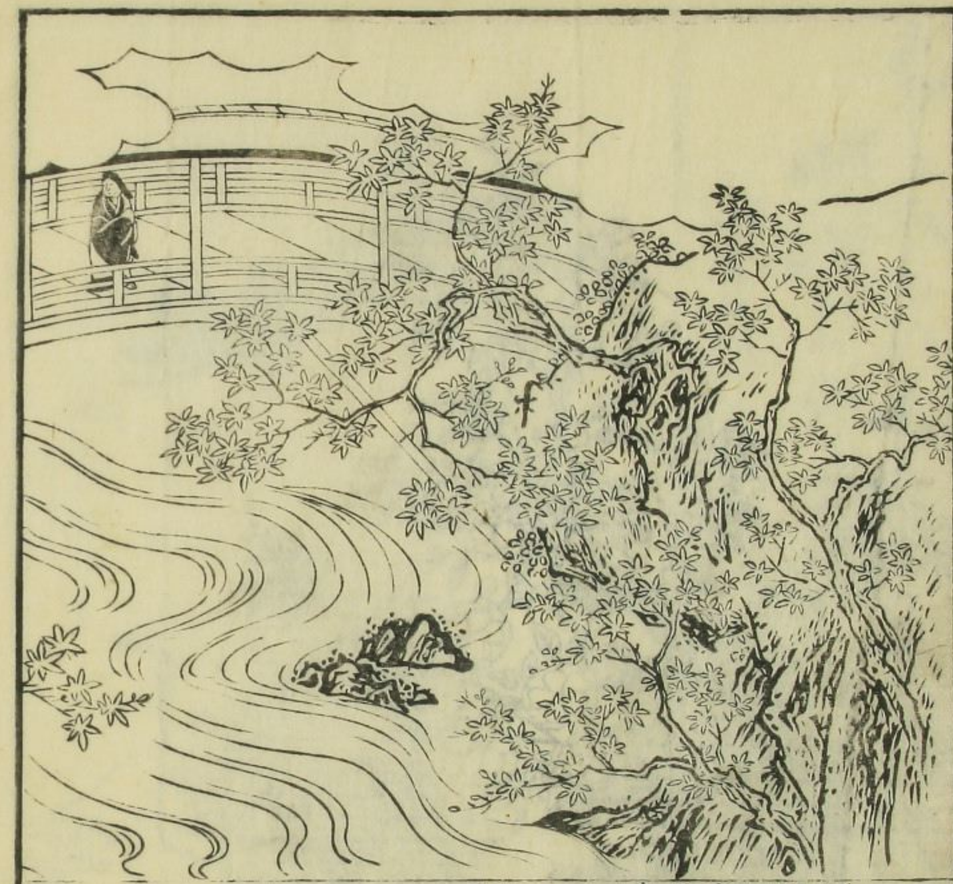
玉生虎見

幼童の時内裏より竹をぬ
き取て
こしらへし
弓矢にて
遊ぶ

成淵法師

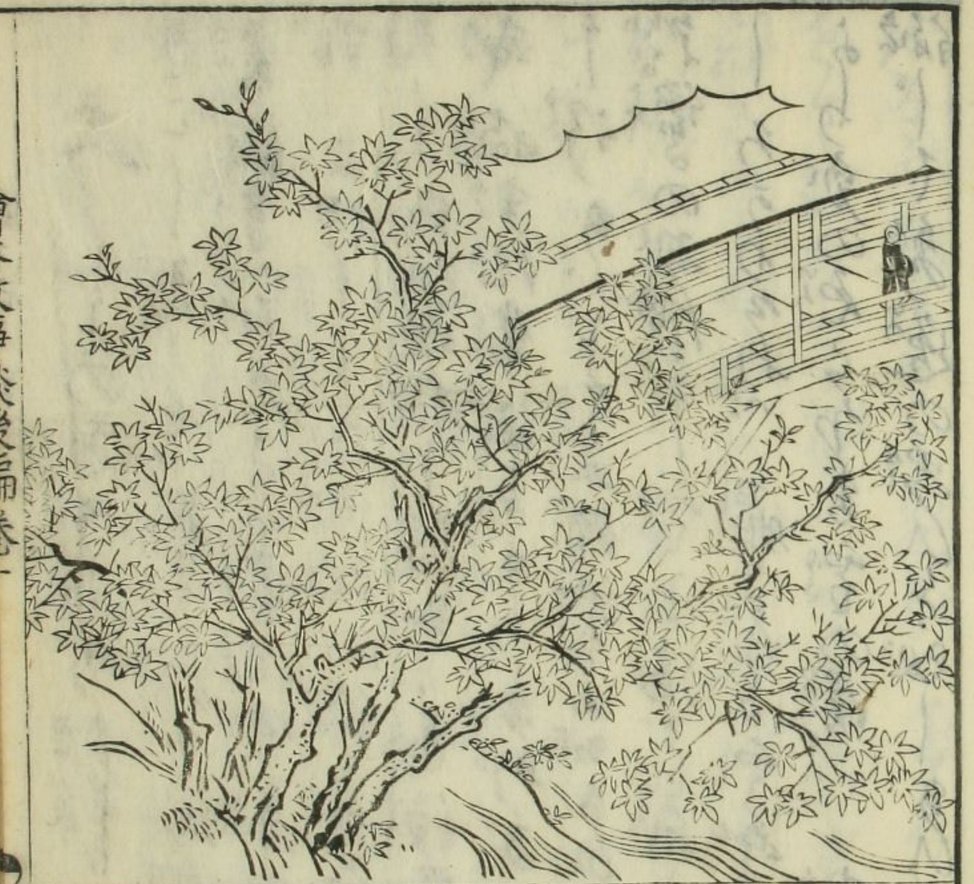
行あるひ佐の法師成淵と云る僧さうりの
時雨降の中を橋を渡ん為に
是非なく
しけるみ山の夜嵐に
那し
部ぞ野錦
んうゝ那くゆんつと形きて
山路の花
年の中
うゝ
年

あるるあるもあるくるまくるまいる
山路の花毛ごろもあるあるを
いるのこのそばを誰と聞くん



徹書記

徹書記い東福
ちょうていいまして
清巖和尚と云ひる。
和尚如こうて
或時の新
中くに
居の
桐の
秋の



新歌
山科
招月
七月
中くに

えいじとのをとふの夕暮(ゆふぐれ)まうく世宗(あるじ)を
おこしたしておそれ成思(おもひわけ)がたく
東寺(とうじ)へおさへたる書紀(ちょき)中納言(ちうなごん)の詠しも熊(いまくまの)
野より旅して日比(ひごろ)の願主(ぐわんしゅ)に満(まん)願(さう)の行ひ螢(ほたる)
先(まづ)しかひ姫(ひめ)後(そのかたはら)を後(のち)ともあはしとぞ
或時(あるとき)書紀(ちょき)東使(とうし)より京(みやこ)へ帰(かへ)る檀通(だんつう)のともし
て行(ゆき)あふとて五條(ごぜう)河原(がはら)にてあひて物(とう)いふ雪(ゆき)の
朝(わざ)ざれの羽風(はかぜ)に雪(ゆき)を漂(しの)ぎ飛(とび)しに景色(けしき)もあはれ
しろかりければ　飛(とび)きゆる雲井(くもゐ)の鶴(つる)の羽風(はかぜ)
よわがの色(いろ)こそあかす雪(ゆき)の曙(あけぼの)　書紀(ちょき)世宗(あるじ)を
感(かん)じて檀通(だんつう)の思(おも)ひをなしおひけるに　檀(だん)

越前(えちぜん)の守(かみ)など定方卿(さだかたきゃう)へ事(こと)のあひて歌披露(かひろう)
ありし時(とき)世(せ)の中(なか)に事をなせるが歌枕(うたまくら)頌(しょう)せられしに
飛(とび)きゆる雲井(くもゐ)の鶴(つる)の羽風(はかぜ)の和哥(わか)をあはれなる
君(きみ)はよんでそのまゝ書付(かきつけ)く即日(そくじつ)書紀(ちょき)の末(すゑ)なる
を清(きよ)めこの君(きみ)に書紀(ちょき)末(すゑ)わかれく件(くだん)の頌(しょう)をさ
也(なり)しかしかるよ檀通(だんつう)あつて是を相(あひ)く大(おほ)に感(かん)じける
是(これ)よりか偏(ひとへ)に書紀(ちょき)は定方(さだかた)の勅(ちょく)末(すゑ)と人(ひと)にいふ姫

隆尊禅師(りうぞんぜんじ)

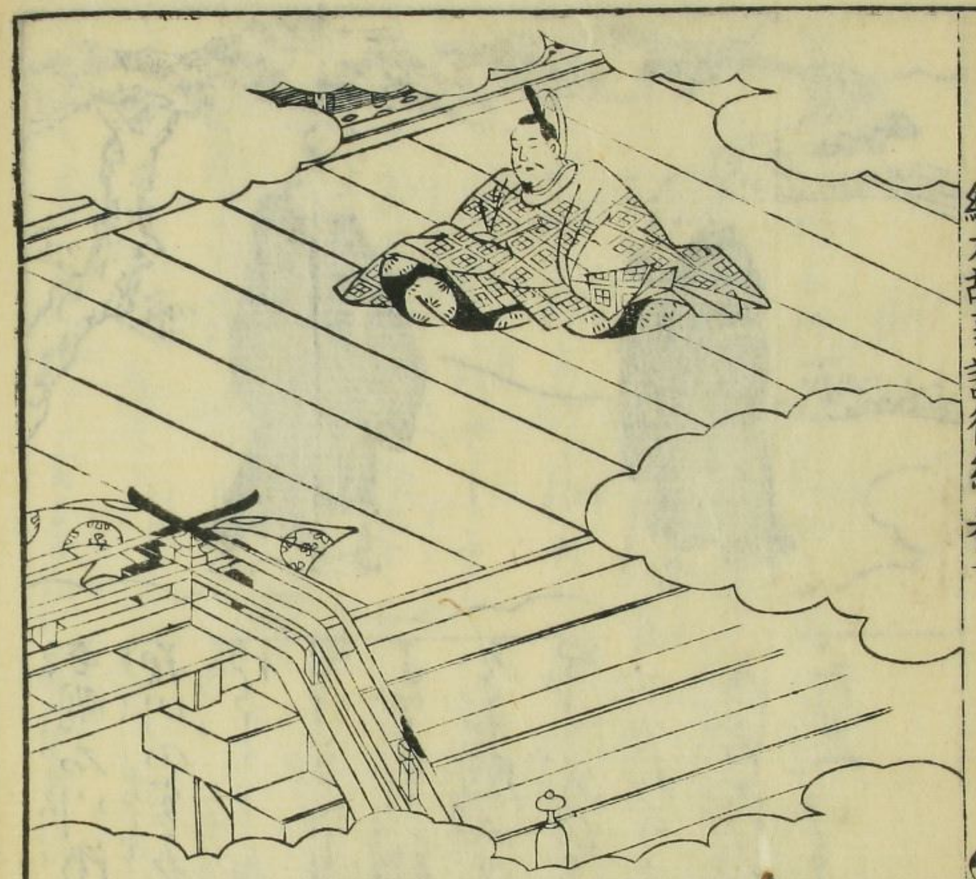
禅師(ぜんじ)隆尊(りうぞん)は藤(ふぢ)原(わら)隆心(たかむね)の子息(しそく)也　坂東(ばんどう)の方(かた)に誕(たん)生(じやう)
給(たま)ひしのひある不(ふ)の地(ち)にて終(をはり)の家(いへ)に前栽(ぜんざい)のさくら
いと見事(みごと)に咲(さき)乱(みだ)れにさきわつ枝(えだ)おれて

ぜんぜんあのぼうしがあるかをおろうとおもへどもよのうちをいでず
冠をぬぎて退出するかのごとくにて
ふ祥ふあるべしとなげきいたるのともふ
ものしてかへりぬ
しかるのち八幡宮の別当
老僧ぼうしをばかぶりこ
ぼきてあるべかりけるとやいへども
ぬきすてて縄をもつてこれをとらへ
いづくにかくしてこれをとらへ
形びんをぬきすまし

顕昭

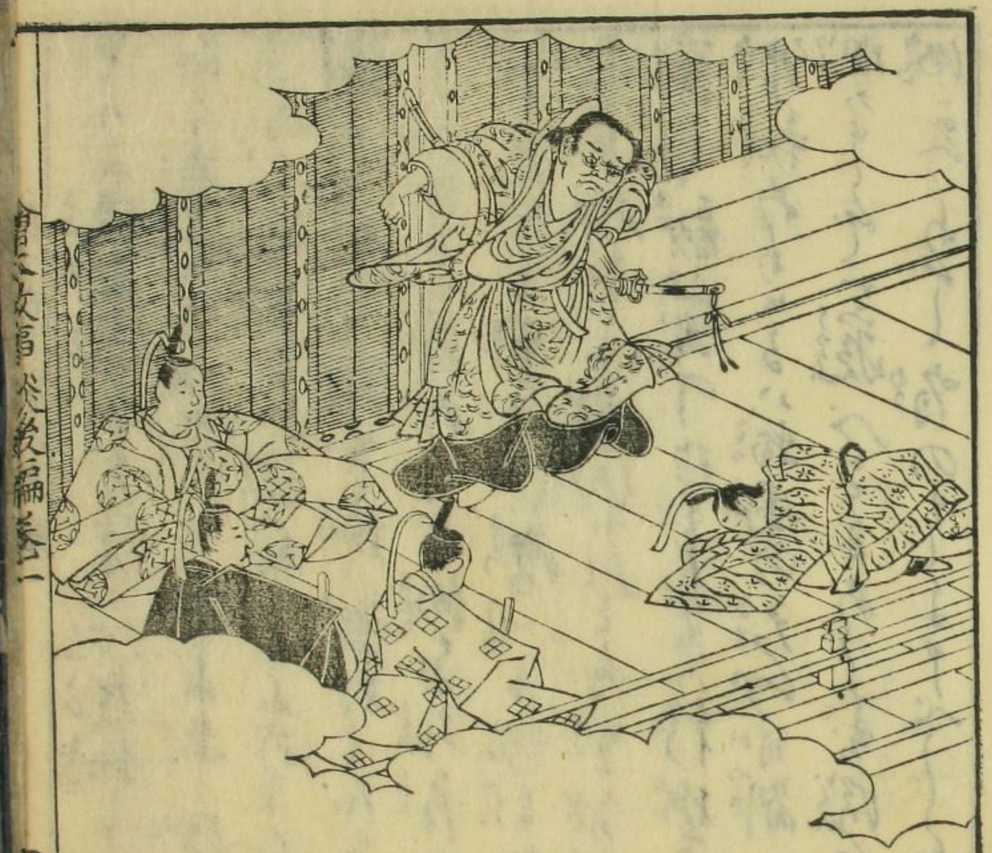
賀茂の社の歌合のあるとき顕昭　月の哀れ　石河の
瀬々の小河の清かれ無き月を見ばやとぞ思ふ
世の人の歌ハ師匠を通やしなをとく歌ハ
とく歌まつりかりかきこそ
かりしのどかくあるしこのこと
なを哀れ歌くハ師匠を
顕昭法師ハ歌ちき歌く
石河瀬の歌の哀れ　哀れ
とくの歌ハ師匠を通
とく事をかくなりと

顕昭　石川瀬の哀れ　哀れ
瀬川の宮ハ　尚社の縁
かりしこも歌の宜
よりて歌ハ
そも顕昭ハ
つべくあり
哀れ男老の
こそ



和氣清麿

称德天皇の御
宇あり削の道
猿と云ふ人帝
の恩顔を蒙り
ら削ら出ら称
ぜられ刺帝位を
奪ふる折から
帝道猿を位を
猿ら奪ひ
思ひ出られども



帝位の御事ハ
ありあり和氣の
清麿を遣しられ
ずとよ和氣の
清麿をいて宮
ばの宮ゐ勅と
遣はされ神明
の御ちかひを
いて雖をあるよ
きを面あるる
御ちかひ道猿ひ

そこのよ法華経をまねきて流布せしむ
ひく事ありの法華経を延しえん
とのこと。おもひ弥勒いつのあらんとも空くあるよ
ほうしもの天下都
しかも世。ひあらぐ法を
しえんと云り。法華つ
やへを知をとる思ひれども
寂し。嵯峨の花も
弥勒知りるハ。和国の
風なるべい寂び
法のへ有のまよ

めいじ者つかはす奏しかりつぶさに
都ハ知らるる通後いにのおもとに
じ法華ちあらいこの節をおもちた偶の国へ
法通後の名をわて下野国
師号の別尚よ
知華ハ解和のる中
れども。いろ神の
仏ハ論じ。ものあて恵
ども。きよ。人の人を我
内侍よわ小野
よ法華び都

遊女白女

高倉天皇の帝の御代に遊女白女
あるよるの夢にみたりけるは
らんぢのもとにまかりて
白女といふものをたづねあはせ
歌をよめとのたまはせの由
をおもひ
なげきて
ものをいふ
なり
なげくこと
のなりけり
又おなじ集にあり
ものなり
是ハ源ノ實カ筑紫ヘトテ下ルニ山崎ニテ別ノ惜ケル待讀ナルベキ

陵王

京極宗輔の公は高倉
の御時の人なり退出
の時月明かりに

けれども心を尽して筆をとるべし筆の用あること
玉のごとく師を法とするものの心術あらんこと
ちからを人間万事の業の繁雑なるに筆の為めで
なく業をもつとめ見えたり。心あるものくるしして筆を
この業をなして楊貴妃の美人一世を風靡し
ものの為に世の邪佞に迷惑よりて南方望家
あるべし。ものすなる行の中へ入りて筆の世業
弘感あるべしとあるべし

畫共通考巻之一

アツ丁。

早稲田大学図書館
011788030470